

あ と が き

子供たちを取り巻く社会は少子高齢化・グローバル化がますます加速し、大きく変化しています。特に科学技術の発展は著しいものがあります。このような変化の激しい予測困難な時代の中でも子供たちが心豊かに、強く、たくましく生き抜く力を身につけさせることは学校の使命です。また一人一台端末の有効活用等、ICT機器の授業への効果的な活用、コロナ禍で子供たちの運動量が低下した影響による体力の低下への対応等、時代の要請に応える新しい取組を行いつつも、変わらずにあるべき姿を見失うことなく教育を行っていくことも求められています。そのような中で、本校では、「知・徳・体の調和のとれた児童の育成を図り、児童一人一人のよさと可能性を伸ばす」という学校教育目標の達成に向かって取組を続け、社会がどんなに変化しても知識基盤社会を強く生き抜く力を身につけるよう、研究を進めてきました。

校内研究では、学校教育目標の具現化に向けて、児童の実態を踏まえながら、主に知の部分に焦点を当て『自ら学び、考えを深めることができる児童の育成～論理的思考力を養うための指導法の工夫～』という研究主題を設定しました。そして、研究目標を「論理的思考力を養う授業を通して、自ら学び、考えを深める児童を育てる。」として、研究を進めてきました。実際の研究においては、論理的思考力を養うために、また、子供たちにとって分かりやすい授業づくりのためのために「甲府スタイルの授業」の指導過程を拠り所として全学級で授業づくりに取り組みできました。特に板書とノート指導、授業の「課題」「見通し」と「ふり返り」を取り上げて日々の研究を進めてきました。このことが子供の立場に立って考えてみると「学習の見通しが持ちやすい」「学習の課題がよく分かる」「ノートがとりやすく、前の授業のふり返りもしやすい」などの分かりやすい授業づくりに繋がりました。

昨年度中教審から示された「令和の日本型教育を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」では、教師の学びの姿も変化することが必要であると指摘をされています。そう考えると書物や理論やマニュアル化された授業スタイル、そしてICT機器を活用すれば、分かりやすい授業は成り立つことが校内研究でも検証をされましたが、「豊かな授業」づくりという点では、それだけでは成り立たないと思います。私たちは書物や理論だけではない「目の前にいる子供に向き合い、子供と共に学び、子供からも学び、学び続ける教師」でなければならないと思います。コロナの3年間、大きな社会問題にもなっている「教員の多忙化」の改善を考えれば、限られた勤務時間の中で時間の使い方を工夫しながら、職場の同僚と学び合う、教員相互の情報交換や学びの共有の機会がこれからは大切です。効率よくするためにも当然その中にICT機器の活用は必須です。本年度本校では研究主任を中心として授業をchromebook「玉諸小職員室」のクラスルームに公開し、感想の書き込みを行ったり、体育授業のミニ講習会を行ったりするなど日々の校内研究が職員室でも日常的に行われていました。このような同僚性や共感性の高い職員集団が玉諸小学校の大きな強みとなっています。授業には教師の持ち味や人間性がストレートに表れます。豊かな授業づくりのために、このような同僚教師との学び合いや関わり合いを、これからはもっと大切に、私たちは常に自分自身を高めていかなければならないと感じています。

おわりに、私どもの研究に対しまして、継続してきめ細かく貴重な御指導、御助言をいただきました諸先生方、関係機関の皆様に、心から感謝申し上げます。また、日々の実践に生かせる研究に主眼を置いて積極的に研究を推進してくれた各組織のリーダー、知恵を絞って出し合ったブロックの研究での全職員の姿勢は素晴らしく、一人一人が積極的に、協働的に進められた校内研究会であったことをとても誇りに思っています。本当に御苦労様でした。

教頭 篠原利明